

PRAEVIDENTIA DAILY (4月14日)

昨日までの世界：ドル/円、上値も重いが下値も固い

先週金曜はドル、円、ユーロは方向感のない展開だったが、カナダドルとポンドの下落がやや大きかった。特段材料はなかったようだが、東京時間午後8時以降に米国を始め多くの国で株価軟調と同時に長期金利が低下していたが、カナダ10年金利の低下幅が米国等よりも若干大きかったことから、4月4日以降対米ドルで大幅上昇が続いていたカナダドルのロングポジションの手仕舞い・反落に繋がったとみられる。3月26日付の当レポートで指摘していたように、4月はポンドとコモディティ通貨（豪ドル、NZドル、カナダドル、南アランド）が上昇する傾向があるが、これらの通貨は先取りして3月末から大きく上昇し始めていたことから、早めに上昇一服が到来しているかもしれない。

この間、ドル/円は概ね101円台半ばを挟んでもみ合いの展開だったが、これまでの下落基調や米長期債利回りの続落にも拘らず前日終値対比では小幅持ち直しており、上値の重さと同時に下値の固さも意識される動きとなっている。米ミシガン大消費者信頼感指数の速報値は82.6と前月および市場予想を上回ったが、ドルや米長期債利回りに対する押し上げ効果はごく限定的・一時的に留まった。

ユーロを巡っては、ECB高官から強弱両方向の発言が出ているが、結果としては対ドルで概ね1.38ドル台後半での横ばい圏内の方向感のない動きに留まった。ややタカ派のNowotnyオーストリア中銀総裁は、最近述べている量的緩和慎重論・資産担保証券購入より選好するという発言に加えて、次回5月ではなく6月の政策理事会で重要な決定が行われる可能性があるとして述べ、次回会合での緩和措置を期待する向きからするとタカ派的な発言となった。他方、Coere理事は、ユーロが強くなればなるほど、より強力な金融緩和措置が必要になると述べ、最近のNoyerフランス中銀総裁など他のECB高官のユーロ高を意識した発言に続き、足許のユーロ高を考慮すればハト派的な発言だった。また週末12日にもDraghi総裁が、ユーロが更に上昇すれば追加緩和が必要になると発言、追加緩和期待の高まりが月曜早朝のユーロ安の一因とみられる。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米2年金利差	米2年金利	日2年金利	米日10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	+0.1	+0.00	+0.00	+0.00	-0.02	-0.02	-0.00	-0.9	-2.4	+0.3	-0.1
ユーロドル	-0.0	-0.00	+0.00	+0.00	+0.01	-0.02	-0.02	-1.3	-0.9	-0.1	+0.05
ポンドドル	-0.3	+0.00	+0.01	+0.00	+0.01	-0.01	-0.02	-1.2	-0.9		
豪ドル/米ドル	-0.2	-0.04	-0.03	+0.00	-0.01	-0.04	-0.02	-0.9	-0.2	-0.3	
NZドル/米ドル	+0.1	-0.00	+0.00	+0.00	+0.02	+0.00	-0.02	-0.9	-0.2	-0.3	
米ドル/加ドル	+0.4	+0.02	+0.00	-0.01	+0.02	-0.02	-0.04	-0.9	+0.3	-0.3	

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化率(%ポイント)。

主要通貨ペアの前週比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化(先週1週間)

	変化率	米日2年金利差	米2年金利	日2年金利	米日10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	-1.6	-0.05	-0.06	-0.00	-0.05	-0.10	-0.04	-2.6	-7.3	+2.6	+0.6
ユーロドル	+1.3	+0.05	-0.01	-0.06	+0.05	-0.05	-0.10	-3.5	-2.6	+0.6	+0.09
豪ドル/米ドル	+1.1	-0.01	-0.06	-0.06	-0.04	-0.14	-0.10	-1.9	-2.6	+3.5	+1.5
NZドル/米ドル	+1.0	+0.03	-0.03	-0.06	+0.05	-0.05	-0.10	-1.9	-2.6	+3.5	+1.5
ポンドドル	+1.0	+0.03	-0.03	-0.06	+0.02	-0.08	-0.10	-2.0	-2.6		
米ドル/加ドル	-0.0	-0.01	-0.06	-0.05	-0.00	-0.10	-0.09	-1.9	-2.6	+2.6	+1.5

(注) 為替相場、株価および商品価格は前週比変化率、金利は前週比変化率(%ポイント)。

きょうの高慢な偏見：日銀追加緩和期待は再び高まるか

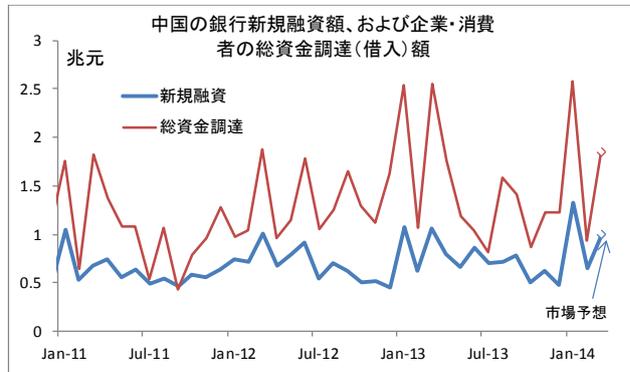
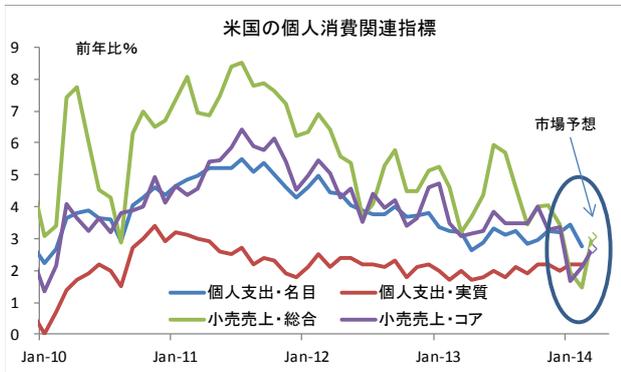
注目通貨：ドル/円↑

きょうの指標、イベント	時刻	前期	市場予想	備考
英 4月ライトムーブ住宅価格・前年比	8:01	+6.8%		
ユーロ圏 2月鉱工業生産・前月比	18:00	-0.1%	+0.2%	
米 3月小売売上高・総合・前月比	21:30	+0.3%	+0.9%	
同・除く自動車・建材・ガソリン)・前月比	21:30	+0.3%	+0.5%	
カナダ 3月 TN 銀行住宅価格・前年比	22:00	+5.0%		
米 2月企業在庫	23:00	+0.4%	+0.5%	
中国 3月新規融資額・元		6,445 億	1 兆	11-15 日に発表

(出所) プレビデンティア・ストラテジー作成

ドル/円は、先週までに2月4日の年初来安値 100.76 円を下抜けしていたらベア観が強まっていたはずだが、101 円丁度近辺でサポートされており、目先更にレンジ観が強まるリスクが高まっている。本日は米 3 月小売売上高が注目で、前月比で市場予想通りの伸び(総合+0.9%、除く自動車・建材・ガソリン+0.5%)となれば前年比でも 3%程度と悪天候前の伸びをなんとか回復することになる(下図を参照)。これを下回ると回復が鈍い、という判断になりドル売り圧力となるが、このところ下支えされている 101 円近辺を明確に下回らない場合には、逆に底堅さをより強く意識させドルが持ち直すリスクもある。また本邦サイドでも、安倍首相が黒田日銀総裁と次回 4 月 30 日の決定会合までに会合を持つ、と報道されており(12 日、WSJ 紙)、前回の黒田総裁記者会見以後、急速に後退しつつある日銀の追加緩和期待が政治主導で再び高まり、ドル/円の押上げ要因となるリスクも出てきた。週明けのドル/円はどちらかという上振れリスクを意識した展開となるだろう。

本日発表かは分からないが、中国の 3 月新規融資額も注目される。中国当局が緩やかな減速を容認するとの見方が広まっていた中で 1 月分の新規融資額が 1.32 兆元と急増して以来注目を集めている。前年と同様に 2 月に反落した後、3 月分は再び 1 兆元へ増加する予想となっている(下図を参照)。市場予想を上回るようだと、政府が景気下支えのために銀行に対して貸出を増加するよう指導しているとの見方に繋がる可能性がある。この場合、先週の利首相の発言で政府による景気刺激策への期待感は後退している中で、銀行与信を通じた景気刺激は行われるとの見方から、リスクオンの反応となり豪ドルや NZ ドルの下支え要因となるかもしれない。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。
 当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。
 当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。

プレビデンティア・ストラテジー株式会社
 金融商品取引業者(投資助言・代理業) 関東財務局長(金商)第 2733 号
 一般社団法人 日本投資顧問業協会 会員番号 012-02641